

風景と共感覚

——王朝文学試論——

高橋文二

春秋社

著者紹介

1938年生れ。駒沢大学・同志社大学・京都大学などに学び、現在、駒沢大学において国文学を講ずる。

風景と共感覚●王朝文学試論

©著者 ^{たかはし}高橋 ^{ぶんじ}文二

1985年9月30日 第1刷発行

定価 3000円

発行所 株式会社 春秋社

発行者 神田 明

東京都千代田区外神田2-18-6

電話 (03) 255-9611 振替東京8-24861

印刷 共同印刷 製本 東海特殊製本

Printed in Japan

凡 例

一、本書に引用する『源氏物語』や『更級日記』を初めとする諸作品の本文は、確認の便宜を慮って、おおむね岩波書店の『日本古典文学大系』本によった。ただし、本書の統一的視点から、仮名に漢字を当て、あるいは漢字を仮名になおし、仮名づかいを改めるなど、改変を施した箇所も多い。

一、引用文の末尾に(『源氏物語』一〇四)などあるのは、『源氏物語』の古典大系本の一巻の四十五頁の意である。『更級日記』や『狭衣物語』など、古典大系本の一冊のうちに本文がすべて収まっているものは、文末にその頁数のみを漢数字で表すことにした。(四八五)などあるのは、四百八十五頁の意である。

一、『万葉集』の引用に際しては(巻一・二七)の如く、まず巻数を明記し、その下に『国歌大観』による歌番号を示した。一、『古今集』など勅撰集の引用に際しては、巻数、歌番号は特に必要な場合以外は記さず、かわりに「春歌上」「恋歌一」などの部立名を記すに止めたが、それはそれで十分に確認し得、しかも一見してその歌の対象の何であるかの概略が判ると考えたからである。

一、『枕草子』や『伊勢物語』などの引用に際しては、通例に倣って、古典大系本の段数を掲げるに止めた。

一、『今昔物語集』の引用に際しては、巻数と第何話であるかを明記し、さらにその下に(四一四四)の如く、古典大系本の巻数と頁数を記した。

一、『梁塵秘抄』の引用に際しては、四句神歌「経歌」の如く、当該歌を含む大・小の部立項目をまず記し、続いて古典大系本の歌謡番号を記した。

一、『古代歌謡』の引用に際しては、古典大系本の歌謡番号を記した。

一、注は当該箇所の右脇に(一)の如く小字で記し、各論の末尾に一括して記した。

目

次

序 王朝文学世界の風景と情念

三

第一部

喪失感と自然 ●『更級日記』の世界(一)

四

原光景と自然 ●『更級日記』の世界(二)

七

月影論 ●王朝女流文学世界の懐旧性と自己救済に関連して

八

月影の視点 ●『更級日記』と『今昔物語集』

二三

共感覚世界と「影」 ●王朝文学の想像力について

二五

「思ひ出」論(一) ●執と浄化の軌跡―『源氏物語』「幻」巻をめぐって

二六

「思ひ出」論(二) ●浄化なき思ひ出―『源氏物語』「夢浮橋」巻小見

二七

風景論(一) ●「風景」について

二八

風景論(二) ●『土佐日記』『蜻蛉日記』の風景描写

二〇六

風景論(三) ●「風景」と歌物語的世界―『源氏物語』「賢木」巻考

三二七

風景論(四) ●「見ゆ」の心―「風景」と時間

二四六

第二部

「物語」試論

二七〇

歌物語から物語へ

二九五

まめなるものの頽落 ●「物語」の視座

三二五

常世の面影 ●『源氏物語』の「まめ人」「まめ」をめぐって

三三三

王朝の人工楽園 ●「おもしろし」の世界

三三三

覚書 三七五

あとがき 三六一

風景と共感覚

● 王朝文学試論

序 王朝文学世界の風景と情念

ここに収めたものは、私なりの持続する問題意識によって捉えられた王朝文学世界のありようについて、序を含めて十七篇の小論である。これらの論稿は大きく分けて、

(一) 風景のありように関するもの

(二) 情念のありように関するもの

の二つで、(一)は第一部に、(二)は第二部にほぼ収めた。

(一)は、摂関政治下の王朝人の心がいかに自然を見、捉え、表現していったか、という人間と自然との関係に関する。ここで風景とは単なる自然の景観の謂ではなく、心象としての風景に近い。景観としての自然の印象が、例えば、ある場所、ある時の心を縁取る形（あるいは象）として——つまり、形なき心を縁取る形として記憶の底に沈み、折々は蘇って今の心を揺する。その形を思い浮かべることは、その折の心のありようを思い出すことに繋るであろう。そういった心の形とも言うべき自然の印象を総じて「風景」として捉え、王朝人の心に深く関る特にその慰藉的・浄化的なありようを探る。その

ことは、当然のことながら王朝人の想像力の、また感性の性格、特質を明らかにしてゆくことに關る。それらのことへの問題意識を(一)の諸論の中心に据える。

(二)は、日常の秩序や規範や判断などと拮抗しながら、心の内側に盛り上ってくる情念、というものの押さえ難いありようを探り、その情念を基盤とする「物語りす」る心の特質、さらには「物語」世界のありようを考えてみようとするものである。

ここで情念とは、幅広くは、喜び、悲しみ、驚き、憎しみ、愛、望み、などという、いわゆる感情の領域を包み込みながら、それら感情のより強い表れとしての、つまり、しばしば肉体的な反応さへも惹起させるものとしての、心理学などに言う情動エモーション〔英〕emotion, affect〔独〕Affekt〔仏〕émotion, affectivité)の領域をも含む。それは非合理的な持続する力であり、秩序のうちにある人の心を激しく揺すり、時に深い苦悩をもたらすものとしての情念パッションであり、この国の古くからのものに從えば、「思ひ」の領域に深く重なる。

(一)と(二)との諸問題は次のような情況下において關りあう。

例えば、情念は、思ひは、しばしば当然のことながら、秩序や規範の壁の前に挫折する。挫折した思ひの前に、しばしば花や月という自然が現れる。思ひを慰藉し、浄化してゆくかのように自然が現れる。自然はさまざまの思ひ出にくるまれ、また古歌や漢詩に縁取られ、まさに風景としてそこに現出し、思ひと融和する。つまり、人間劇とも言ふべきものの基底に持続して存する情念・思ひと、人間劇に疲れた心を大きく包み、慰藉し、浄化してゆくものとしての風景、という相互に深く絡みあうもの同士の有機的な關連がそこに存する。

これら二つの対象のありようは、単に私個人の興味と関心に限定されるものではなく、王朝文学世界の二つの大きな現象でもある。それら本書において言及する諸問題について、まずこの序において、総括的・概論的に触れ、本書の展望を示しておきたい。

(1) 風景の慰藉と浄化

平安朝の摂関政治下の文学作品、とりわけ女流作家たちの文学作品に親しみながら、これまで私が強く心を惹かれてきた表現上の特徴は、まず第一にそこに描かれている、いわゆる自然描写、自然と人情とが深く絡みあつて描かれているという意味では景情描写、さらに本書の文脈に応じたもの言いとしては風景描写、に関するものであった。

と言つても、山川草木、言うところの自然が人間関係の背景として、環境として、描かれてゆくことはもとより当然なことであり、その描写の量的な多さ自体が問題として関ってきたわけではない。問題は、それら風景描写が、しばしば物語の中で、直接の筋の展開には一見、関りなく、あたかも間奏曲か何かのようにふつと挿入されていることであつた。筋立てを表立ててゆくとそれらは一見、不必要な饒舌のようにも思われるが、しかし、その饒舌に対して私たちの感性は違和感を持たず、しかも、その描写が欠けてしまうと、物語世界の根幹に関するものが失われてゆくような微妙な印象を覚えるのであつた。

そのことは、風景描写の多さの故に、むしろ折々見過されがちな風景描写の意味を、あらためて問

うてみようという気持ちに私をさせた。それら風景の描写は単に背景としての自然の描写として終るものではなく、物語世界の登場人物たちの、さらには、それを読み、聴く者たちの心理・心情の動きに微妙に関ってくるものだ、ということが、単なる印象としてではなく、その意味を追尋し、探究すべきものとして心に懸つてきたのである。

場面としては、さまざまなのが思い浮かぶ。例えば『源氏物語』『桐壺』巻の、周知の、更衣の死後の、その実家への弔問の場面を思い浮かべて見るのもよいであろう。あるいは「賢木」巻の、巻頭近くにある、これまた周知の、光源氏の野宮訪問の場面を思い浮かべてもよいであろう（このことについては第一部「風景論」で触れる）。

鞍負の命婦の弔問の場面がなぜ「野分だちて」とか「夕月夜のをかしきほどに」といった自然の点景を借りて、まずは語り出されていかなければならないのか。行き着いた実家の荒涼としたありさまが、

闇にくれて臥し給へるほどに、草も高くなり、野分にいとど荒れたる心地して、月影ばかりぞ、八重葎やえむらにもさはらず、さし入りたる。（古典大系本一三四）

と自然の景観を先立てて描写されていかなければならないのか。それらはそのときの現場の客観的情況を示すものであり、現場の背景として是非ともなくてはならないものだ、というには、描写は心埋に密着して思い入れ深く、表現は客観的情況を叙するにしては概念的に過ぎる。饒舌のように見えて、

日常的事実の描写、再現とは大きく異なった描写なのである。

「野分だちて……」の後には、帝の「常よりも思し出づる」さまが描かれ、「夕月夜のをかしきほど」のすぐ後には、「やがて、ながめおはします」という帝のものの思いに耽るさまが記される。実家のさまは「闇にくれて臥し給へるほどに」という更衣の母の悲嘆のさまに先取られている。ここにあるものは自然と人情の深い絡みあいであり、登場人物たちはその自然と人情のはさまを微妙に歩み行き、読者もまたその時空を共感とともに歩む。しかし、それらのありようが物語の筋の展開の上で、具体的に何を語っているのか、となると、さほどの意味があるとも思えない。帝が弔問の使いを遣り、更衣の母が使いに接して辛い心のうちを述べた、という展開の上に、事件、事実としての何を加えるわけでもない。しかし、だからといって、この場面を欠いてしまうならば、——それは王朝の女流文学の作品であることの大事な要件を放棄してしまうように思われるのである。

「賢木」巻の野宮訪問の描写もやはり同じような意味を持っている。六条御息所との出会いに先立って光源氏は、秋の花が咲き、虫がすだき、松風が響き、そこにも、の、音、という人事の深く共鳴する野を通り過ぎる。秋の花も虫の音も、また松風も、単なる自然である前に既にして先人の伝統的な歌語のイマージュのうちに掬め捕られていた。光源氏は非情な自然のうちを彷徨うのではなく、人事に深く侵され、それ故に人の心にやさしい風景のうちを歩み行くのであった。

なぜこのような風景の場が、あたかも道行のように、命婦の、更衣の母との出会いに先立って、また光源氏の、六条御息所との出会いに先立って描かれなければならないのか。

表現が自然と人事の絡みあい、融和のうちにあり、といった程度の言いようでは収まり得ない重さ、

深さがそこにあるように思われる。そのことの意味をさらに徹底して考えていかなければならないのではないか。

例えば、「桐壺」巻にあって、先の描写は、更衣の死と、それを巡る人々の悲嘆のうちに描かれていた。「賢木」巻にあって、光源氏と六条御息所の出会いは、葵上の死の体験を中核に置いて互いの心の深い亀裂のあとに生じたものであった。悲しみや嘆きや心の齟齬、差隔はなまじいの補いによって償われる状態にはなかった。

登場人物たちのそのような心を前提にして描かれてゆく先の風景描写には、既にそれが、対象の客観的な叙述ではなく、人情によって深く包み込まれた表現である、ということによって予感されるように、登場人物たちの心の慰藉、鎮静、浄化に関わってゆくものがあると考えられるのである。それらの風景描写がそこに記されているということは、登場人物たちの微妙な心のありようを描くことに密接した、大事な、物語の構成要件なのではないかと考えられるのである。つまり、風景を描くことによって、心が、「思ひ」が、鎮まってくることが必要なのだと思われるのである。

「桐壺」巻の吊問の場において、その風景描写は、帝の意を受けた命婦と、それを迎え入れる更衣の母の悲しみの極にあった心とを深く融和させるもの、しかも、その描写によって、死んだ更衣の魂さえもが安まり、鎮まってくくものと考えられたのではないか。さらに読者さえ命婦の路程を、命婦と更衣の母との出会いの場を、この秋の景観のもとに追体験すべきものだったのではないか。

第一部「風景論」で詳細に触れるように、「賢木」巻にあって、また同様なことが考えられる。深い亀裂の関係にあった二人があたかも今恋しあっている恋人同士のように出会い、互いの思いのた

けを述べあうという大きな心変りに、出会いに先立つ風景描写が関っていないはずはない。光源氏も秋の自然と人事の交錯する風景の中を歩み行くことによって、鎮静と浄化を得、御息所の痛苦の領域にまで徐々にその心を下して行ったように思われる。特に二人の心が歌を介して深く結びあっていたことは、その場が、単なる日常の事実の再現でも、日常的世界の延長にあるものでもないこと、むしろ互いに傷ついたままに別れてはならないという祈念とも願望とも言うべきものによって支えられた、きわめて人為的な虚構の時空間であることを語っている。先の風景描写は、右のような時空間に向って高まってゆくべき光源氏の心を用意した、と言ってよいであろう。しばしば「みやび」と称される王朝の美的世界のありようを、右に述べてきたような虚構の時空間のありように関連させてゆくことも可能なのではないか、と私は思っている。

(2) 風景と思ひ出

自然が、自然の本来のありかた、つまり人知と隔絶した領域で存在し続けることを止めるわけではない。つまりは主観の表れにすぎなからうが、人はその自然をおのれの観念によって包み、馴致し、心の内側に風景として定着させてゆく。先に述べた「桐壺」巻の弔問の場面、「賢木」巻の野宮訪問の場面、それらはまさしく心のありように深く響きあう風景であった。また、それ故にこそその風景は心の慰藉、浄化にも深く関っていくことが出来たと言つてよい。

勿論、風景のすべてが慰藉的、浄化的意味あいを呈するわけではない。心のありように応じて、風

景が酷薄粗暴な表情を露呈し、人の心を脅かし、傷つけ続けることもごく当り前の事態として想定し得るからである。そのことはそのこととして考察してゆくべきものであり、私自身そのことの一端を「原光景」という視点から捉え⁽³⁾もしたが、王朝の文学、とりわけ王朝の女流文学の世界に表れている風景は、はるかに柔和であり、人事の中で傷ついた心をも深く包み込み、慰藉してゆくものとして作用してい、それが人の心を威圧するようなものとして作用してくることはめったに見られないことであつた。

さらにここでは、それらの慰藉と浄化に関する風景の中に際立っているものとして、風景を貫く思い出のありようを想起しておきたい。「賢木」巻の野宮訪問の場面の風景の背景にも、勿論、光源氏や六条御息所の種々の思い、つまり、当然のことながら、過去の出来事の思い出が絡んではいたが、それが直接的にその場の風景描写の叙述に関っているわけはなかった。つまり、『伊勢物語』の四段、「月やあらぬ春や昔の」の歌のある場面のように眼前の風物が過去の風物のイメージと重層してその場の風景を形作っている、というほどではなかった。

勿論、ここで思い出とは、単に過去のことを思い出す、といった程度の状態を意味するのではない。あるいは例えば、閉じられた部屋の中で、しかも眼を閉じて、何ぞ昔のことを思い出している、といったようなことを意味するのではない。もっと積極的なものを、つまり、眼前の景観と共鳴してくるような記憶を、ここでは想起しておきたいのである。今の時空と昔の時空とを共鳴させ、そこに審美的、想像的な時空を、風景を、現出させるような思い出のことである。

例えば、『更級日記』の、作者十五歳の折の、死んだ乳母を思い浮かべる条を採りあげてみよう。